

片恋

芥川龍之介

青空文庫

(一しよに大学を出た親しい友だちの一人に、ある夏の午後京浜電車の中で遇つたら、こんな話を聞かせられた。)

この間、社の用でYへ行つた時の話だ。向うで宴会を開いて、僕を招待してくれた事がある。何しろYの事だから、床の間には石版摺りの乃木大将の掛物がかかつていて、その前に造花の牡丹が生けてあると云う体裁だがね。夕方から雨がふつたのと、人数も割に少かつたので、思つたよりや感じがよかつた。その上二階にも一組宴会があるらしいが、これも幸いと土地がらに似ず騒がない。所が君、お酌人の中に――

君も知っているだろう。僕らが昔よく飲みに行つたUの女中に、お徳つて女がいた。鼻の低い、額のつまつた、あすこ中での茶目だつた奴さ。あいつが君、はいっているんだ。お座敷着で、お銚子を持つて、ほかの朋輩なみに乙につんとすましてさ。始は僕も人ちがいかなと思つたが、側へ来たのを見ると、お徳にちがいない。もの云う度に、願をしゃくる癖も、昔の通りだ。――僕は實際無常を感じてしまったね。あれでも君、元は志村の岡惚れだつたんじゃないか。

志村の大將、その時分は大真面目で、青木堂へ行つちやペパミントの小さな罎を買つて

来て、「甘いから飲んでごらん。」などと、やったものさ。酒も甘かったろうが、志村も甘かったよ。

そのお徳が、今じゃこんな所で商売をしているんだ。シカゴにいる志村が聞いたら、どんな心もちがするだろう。そう思つて、声をかけようとしたが、遠慮した。——お徳の事だ。前には日本橋に居りましたくらいな事は、云つていないものじゃない。

すると、向うから声をかけた。「ずいぶんしばらくくだわねえ。私がわたしにわたくしいる時分にお眼にかかった切りなんだから。あなたはちつともお変りにならない。」なんて云う。——お徳の奴め、もう来た時から酔つていたんだ。

が、いくら酔つていても、久しぶりじゃあるし、志村の一件があるもんだから、大に話おおいがもてたろう。すると君、ほかの連中が氣を廻わすのを義理だと心得た顔色で、わいわい騒ぎ立てたんだ。何しろ主人役が音頭おんどうをとつて、逐一白状に及ばない中は、席を立たせないと云うんだから、始末が悪い。そこで、僕は志村のペパミントの話をして、「これは私の親友に臂ひじを食わせた女です。」——莫迦ばか莫迦ばかしいが、そう云つた。主人役がもう年配でね。僕は始から、叔父さんにつれられて、お茶屋へ上つたと云う格だったんだ。

すると、その臂と云うんで、またどつと来たじゃないか。ほかの芸者まで一しよになつ

て、お徳のやつをひやかしたんだ。

ところが、お徳こと福竜のやつが、承知しない。——福竜がよかつたらう。八犬伝の竜の講釈の中に、「優樂自在なるを福竜と名づけたり」と云う所がある。それがこの福竜は、大に優樂自在なんだから可笑しい。もつともこれは余計な話だがね。——その承知しない云い草が、また大に論理的なんだ。^{ロジカル}「志村さんが私にお惚れになったって、私の方でも惚れなければならぬと云う義務はござんすまい。」さ。

それから、まだあるんだ。「それがそうでなかつたら、私だって、とうの昔にもつと好い月日があつたんです。」

それが、所謂片恋の悲しみなんだそうだ。そうしてその揚句に例でも挙げる気だつたんだろう。お徳のやつめ、妙なろけを始めたんだ。君に聞いて貰おうと思うのはそのろけ話さ。どうせのろけだから、面白い事はない。

あれは不思議だね。夢の話と色恋の話くらい、聞いていてつまらないものはない。

（そこで自分は、「それは当人以外に、面白さが通じないからだよ。」と云った。「じゃ小説に書くのにも、夢と色恋とはむずかしい訳だね。」「少くとも夢なんぞは感覺的なだけに、なおそうらしいね。小説の中に出て来る夢で、ほんとうの夢らしいのはほとんど一

つもないくらいだ。」「だが、恋愛小説の傑作は沢山あるじゃないか。」「それだけまた、後世こうせいにのこらなかった愚作の数も、思いやられると云うものさ。」

そう話がわかつていれば、大に心づよい。どうせこれもその愚作中の愚作だよ。何しろお徳の口吻こうぶんを真似ると、「まあ私の片恋つて云うようなもの」なんだからね。精々そのつもりで、聞いてくれ給え。

お徳の惚れた男と云うのは、役者でね。あいつがまだ浅草田原町たわらまちの親の家にいた時分に、公園で見初みそめたんだそうさ。こう云うと、君は宮戸座みやとざか常盤座ときわざの馬の足だと思うだろう。ところがそうじゃない。そもそも、日本人だと思ふのが間違ひなんだ。毛唐けとうの役者でね。何でも半道はんどうだと云うんだから、笑わせる。

その癖、お徳はその男の名前も知らなければ、居所いどころも知らない。それ所か、国籍さえわからないんだ。女房持か、独り者か——そんな事は勿論、尋きくだけ、野暮やぼさ。可笑しいだろう。いくら片恋だつて、あんまり莫迦ばかげている。僕たちが若竹へ通った時分だつて、よしんば語り物は知らなかるうが、先方は日本人で、芸名昇しょうぎく菊くくらいな事は心得ていたもんだ。——そう云つて、僕がからかったら、お徳の奴、むきになって、「そりや私だつて、知リたかつたんです。だけど、わからないんだから、仕方がないじゃありませんか。

何しろ幕の上で遇うだけなんですもの。」と云う。

幕の上では、妙だよ。幕の中でと云うなら、わかっているがね。そこでいろいろ聞いて見ると、その恋人なるものは、活動写真に映る西洋の曾我の家なんだそうだ。これには、僕も驚いたよ。成程幕の上では、ちがいない。

ほかの連中は、悪い落だと思つたらしい。中には、「へん、いやにおひやらかしやがる。」なんて云つた人もある。船着だから、人氣が荒いんだ。が、見たところ、どうもお徳が嘘をついているとも思われない。もつとも眼は太分とろんこだったがね。

「毎日行きたくつても、そうはお小遣いがつづかないでしょう。だから私、やつと一週に一ぺんずつ行つて見たんです。」——これはいいが、その後が振っている。「一度なんか、阿母さんにねだつてやつとやつて貰うと、満員で横の隅の所にしか、はいれないんですよ。そうすると、折角その人の顔が映つても、妙に平べったくしか見えなんでしょう。私、かなしくつて、かなしくつて。」——前掛を顔へあてて、泣いたつて云うんだがね。そりや恋人の顔が、幕なりにぺちゃんこに見えちゃ、かなしかろうさ。これには、僕も同情したよ。

「何でも、十二三度その人がちがつた役をするのを見たんです。顔の長い、痩せた、髯の

ある人でした。大抵黒い、あなたの着ていらつしやるような服を着ていましたつけ。――僕は、モオニングだったんだ。さつきで懲りてゐるから、機先を制して、「似ていやしないか。」つて云うと、すまして、「もつといい男」さ。「もつといい男」はきびしいじやないか。

「何しろあなた、幕の上で遇うだけなんでしょう。向うが生身の人なら、語をかけるとか、眼で心意気を知らせるとか出来るんですが、そんな事をしたつて、写真じゃね。」おまけに活動写真なんだ。肌身はなさずとも、行かなかつた訳さ。「思い思われるつて云いますがね。思われない人だつて、思われるようにはしむけられるでしょう。志村さんにしたつて、私によく青いお酒を持つて来ちやくだすつた。それが私のは、思われるようにしむける事も出来ないんです。ずいぶん因果じやありませんか。」一々御尤もだ。こいつには、可笑しい中でも、つまされたよ。

「それから芸者になつてからも、お客様をつれ出しちやよく活動を見に行つたんですが、どうした訳か、ぱったりその人が写真に出てこなくなつてしまつたんです。いつ行つて見ても、「名金」だの「ジゴマ」だのつて、見たくも無いものばかりやつてゐるじやありませんか。しまいには私も、これはもう縁がないもんだとさっぱりあきらめてしまつたん

です。それがあなた……」

ほかの連中が相手にならないもんだから、お徳は僕一人をつかまえて、しゃべっているんだ。それも半分泣き声でさ。

「それがあなた、この土地へ来て始めて活動へ行った晩に、何年ぶりかでその人が写真に出て来たじやありませんか。——どこか西洋の町なんでしょう。こう敷石があつて、まん中に何だか梧桐^{あおぎり}みたいな木が立っているんです。両側はずっと西洋館でしてね。ただ、写真が古いせいか、一体に夕方みたいにうすぼんやり黄いろくつて、その家や木がみんな妙にぶるぶるふるえていて——そりやさびしい景色なんです。そこへ、小さな犬を一匹つれて、その人があなた煙草をふかしながら、出て来ました。やつぱり黒い服を着て、杖をついて、ちつとも私が子供だった時と変つちやいません……」

ざっと十年ぶりで、恋人にめぐり遇つたんだ。向うは写真だから、変らなからうが、こっちはお徳が福竜になつている。そう思えば、可哀そうだよ。

「そうして、その木の所で、ちよいと立止つて、こつちを向いて、帽子をとりながら、笑うんです。それが私に挨拶をするように見えるじやありませんか。名前を知つてりや呼びたかつた……」

呼んで見給え。気持ちがいだと思われる。いくらYだって、まだ活動写真に惚れた芸者は
いなかろう。

「そうすると、向うから、小さな女異人が一人歩いて来て、その人にかじりつくんです。
弁士の話じゃ、これがその人の情婦なんですとき。年をとっている癖に、大きな鳥の
羽根なんぞを帽子につけて、いやらしいったらないんでしょう。」

お徳は妬けたんだ。それも写真にじゃないか。

（ここまで話すと、電車が品川へ来た。自分は新橋で下りる体である。それを知っている
友だちは、語り完らない事を慮れるように、時々眼を窓の外へ投げながら、やや慌しい口
調で、話しつづけた。）

それから、写真はいろいろな事があって、結局その男が巡査につかまる所でおしまいに
なるんだそうだ。何をしてつかまるんだか、お徳は詳しく話してくれたんだが、生憎今
じゃ覚えていない。

「大ぜいよつてたかつて、その人を縛ってしまったんです。いいえ、その時はもうさつき
の往来じゃありません。西洋の居酒屋か何かなんでしょう。お酒の罎がずうつとならんで
いて、すみの方には大きな鸚鵡の籠が一つ吊下げてあるんです。それが夜の所だと見えて、

どこもかしこも一面に青くなっていました。その青い中で——私はその人の泣きそうな顔をその青い中で見たんです。あなただつて見れば、きつとかなしくなったわ。眼に涙をためて、口を半分ばかりあいて……」

そうしたら、呼笛よびこが鳴つて、写真が消えてしまったんだ。あとは白い幕ばかりさ。お徳の奴の文句が好い、——「みんな消えてしまったんです。消えて儚はかなくなりにつけりか。どうせ何でもそうしたもんね。」

これだけ聞くと、大に悟っているらしいが、お徳は泣き笑いをしながら、僕にいや味でも云うような調子で、こう云うんだ。あいつは悪くすると君、ヒステリイだぜ。

だが、ヒステリイにしても、いやに真剣な所があつたつけ。事によると、写真に惚れたと云うのは作り話で、ほんとうは誰か我々の連中に片恋をした事があるのかも知れない。

（二人の乗っていた電車は、この時、薄暮はくぼの新橋停車場へ着いた。）

（大正六年九月十七日）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年10月28日第1刷発行

1996年（平成8）7月15日第11刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utyama

校正：かとうかおり

1998年12月7日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

片恋

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>